

スクール・インターンシップ・プログラム(GSIP)による 新たな学びの可能性(1)

山崎 友子

Where anything is growing, one former is worth a thousand re-formers.

Horace Mann

はじめに

ジョン・デューイ(1859～1952)が伝統的な学校教育に批判を加え、シカゴ大学附属小学校での実践や講演をもとに“The School and Society & The Child and the Curriculum”を著したのは1899年のことであった。社会の変化に伴い教育が新たな課題に直面し、教員養成が改善を求められている現代において、一世紀以上も前のデューイの教育理念と実践が、私達に新たな光を投げかけてくれる。今、かつて自明であった学校における教育の目的と結果は予定調和的に了解されなくなっており、学校の閉鎖性が問題として指摘されている。学校は社会と隔絶して存在するのではなく、デューイが考えるように「学校」も一つの「社会」であると捉え、学習者が主体的に社会の一員として学びに関わる実践を構築することが一つの鍵となる。

「学校」とは学習者が受動的に知識を受け取るだけの場ではなく、一つの「社会」であり、その中で自発的に学びに関わり生活を営む場であるとの考えのもとに成立するのが、本稿で取り上げるインターンシップ・プログラムである。「教授者」と「被教授者」という閉じた関係から飛び出した学生の学びとは、どのような場なのであろうか。岩手大学教育学研究科のスクール・インターンシップ・プログラム(GSIP)参加者(インターンである留学生と支援にあたる日本人院生、受入校の教員と児童・生徒)の資料をもとに考察する。また、参加留学生の本科目最終レポートが「スクール・インターンシップ・プログラム(GSIP)による新たな学びの可能性(2)」として掲載されている。教員研修留学生の研修の成果として、また、本科目検証の生のデータとしてお読みいただきたい。

1 スクール・インターンシップ・プログラム(GSIP)の概要

2002年度、教育学研究科ではブラジルの高校教員であるAさんを教員研修留学生として受け入れ、Aさんの教育現場での研修の機会を設けるため、スクール・

インターンシップを実施した。この試行をもとに 2003 年度から、教員研修留学生を中心とする留学生を対象として、「スクール・インターンシップ・プログラム (GSIP)」を盛岡市教育委員会との連携のもとに通年のプログラムとして開始し、2005 年度からは教育学研究科英語教育専修における選択科目として単位化された。実際に経験することから学びをより深いものとすることを目標とし、指導教員の指導のもとに、地域の学校でインターンを務めながら学ぶ経験教育課目であり、所属する専攻・専修にかかわらず履修でき、すべての専修の学生の必要とする選択科目単位数の 1 部として認定される。インターンとなる留学生の他、留学生の支援に当たる日本人院生 (TF: Teaching Fellow) が履修できる。受講学生には、地域の公教育に貢献する意欲と異文化理解に役立つ何らかの技能を持つことが求められている。指導体制としては、教員研修留学生の所属する講座の代表各 1 名、学部長の指名する者 2 名でワーキング・グループ (WG) を構成し、科目の運営にあたっている¹⁾。単位認定条件として、受入校での研修及び大学での学習 (準備・報告書作成) に 30 時間を当て、報告書を提出することを求め、WG で審査して単位を認定することとなっている。2006 年度は、日本の教育に関する文献の輪読と「インターンへのアドバイス集」作成も追加した。

研修先は、盛岡市教育委員会から市内の小学校・中学校へ留学生のプロフィールが紹介され、岩手大学教育学部附属校園を含めて調整される。勤務のタイプは 4 つあり、いくつかを組み合わせることも可能である。

タイプ I—中学校 1 校を中心に、定期的に外国語指導助手 (ALT) として研修する。毎週金曜日半日を原則とする。

タイプ II—小学校 1 校を中心に、定期的に学校生活を観察しながら国際理解教育等自分の得意分野の授業を担当する。毎週金曜日半日を原則とする。

タイプ III—総合的学習の時間のゲスト・スピーカーとして数校 (小学校中心) を訪問する。昼食を一緒にとることもある。(1 校につき、打合せ・観察半日、授業半日を目安とする。1 回の訪問で複数回授業をすることもある。) 金曜日を原則とするが、変更することもある。

タイプ IV—総合的学習の時間における英語活動の指導者として小学校を訪問する研修。数校となることも可能。昼食を一緒にとることもある。(1 校につき、打合せ・観察半日、授業半日を目安とする。1 回の訪問で複数回授業をすることもある。) 金曜日を原則とするが、変

更することもある。

単位化後の参加人数・受入校数は表1・表2のとおりである。

表1 GSIP 参加者数 人

Year	2006		2007	
	intern	TF	Intern	TF
	4	3	4	5
Type I	0	0	1	1
II	-	1	0	0
III	3	2	-	-
IV	0	0	0	0
I & III	0	0	3	4
II & III	1	0	-	-

表2 GSIP 受入校 校

	2006	2007
小学校	4	5
中学校	2	5

両年とも、教員研修留学生以外にも教育研究科で学ぶ留学生が参加した。留学生の出身国は、ブラジル（1人）、フィリピン（2人）、中国（5人）であった。授業評価の1部として、受入校へのアンケート、児童・生徒へのアンケートを年度末に実施している。

2 研修の例と育成される力

4つの研修タイプは、定期的な研修とワン・ショット・ビジットに分けられる。定期的な研修では、受入校の日常の教育活動に沿うことが重要な配慮事項である。インターンやTFは受入校の要望に従って活動する。明示的な要望だけでなく非明示的なものも推察することが必要な時がある。ワン・ショット・ビジットの場合は、インターン側が授業案を提案し、受入校と相談しながら授業を構成することになる。資料1は、市内中学校において英語科ALTとして研修したインターンの6月研修報告書である。

資料1 GSIP REPORT

Every Friday, I attend two classes of same grade in K Junior High School. The teachers there are really very kind and friendly, and the students are very active though the teachers said they were very shy. Until now, at the beginning of each lesson, I will introduce myself in easy English, and then we will do some quiz (e.g.: Because I came from China, would you tell me which is the capital city of China?) by using some word cards. After self-introduction we will do team teaching.

In team teaching, usually it is conducted in 3 steps (PPP)

1. Presentation:

- ① New words: Each teacher reads the new words twice, and then explains the new words. After explanation, the students will follow us word by word until they can read the words fluently.
- ② Text: First, the teacher and I will play the dialogue in the text, and then the teacher explains the grammar in the textbook, and the meaning of the dialogue. After that, students will follow us sentence by sentence.

2. Practice:

Usually in the part of practice, we will do pair works. The students play the dialogues with their partners, at same time the teacher and I will check and correct their works.

3. Production:

Usually we use some pictures to ask the students use the new knowledge to make sentences. First one or two pictures, we will make sentences together, and then they will try themselves.

I really like GSIP. I can practice what I learned and also I can learn many teaching methods from other teachers. I found the emotion of a teacher is very important. If the teacher was active and seemed very interested in the lesson and the students, the students will accept you sooner or later.

June 15, 2006

(下線部筆者)

インターンは、事前に受入校の教員から自己紹介や出身国についての説明を英語で行うようにとの指示と学級の生徒の実態についての説明を受けている。授業は教科書を使った通常の授業の形式で、インターンの役割はアシスタントとしてTTを行うことである。この経験を、インターンは「大学で学んだことを実践できる」として歓迎している。また逆に、教育現場における実践を大学院で学んだ知識であるPPP (Presentation・Practice・Production) の理論で分析しており、実践に照らして理論をより深く理解することが可能となっていることも窺うことができる。

資料2は、ワン・ショット・ビジット (2005年実施市内公立N小学校における国際理解授業) の打合せ案である。

資料2 N小学校との打合せ案: 岩手大学留学生と学ぶN小学校国際理解授業(案)

1. 日時	2005年 5月 27日 金曜日		
2. 受入学校名	N小学校		
3. 担当の先生のお名前	O先生		
4. 学年クラス名	6年生4クラス		
5. 授業時間	4時間目 11:30~12:15 給食あり 昼休みのふれあいあり		
6. 留学生氏名	S 出身国: 中国 教育学部国際教育院生(日本の語学・塚本)		
7. 補助学生氏名	Y 教育学部英語教育院生 tel:***		
8. タイトル	中国の文化を学ぼう!		
9. 授業	下記の通り		
流れ	時間	ポイント	教材・教具
1) Sさんが入場	2分	・音楽や歌でSさんを迎える。※1	・CDとプレイヤー ・世界地図・指し棒 ・映写機とスクリーン(Sさんのパソコンとつなぐ) ・二胡(Sさん) ・CDとプレイヤー ・スピーカー(Sさんのパソコンとつなぐ) ・映写機とスクリーン(Sさんのパソコンとつなぐ)
2) あいさつ	3分	・Sさんの国の言葉(中国語)で、出迎いのあいさつをする。	
3) 自己紹介	5分	・Sさんの国・故郷、生活の様子を、写真などを使って紹介する。	
4) 中国の文化の紹介 ①中国の民族音楽	25分 (15分)	・中国の民族楽器「二胡」を紹介する。実際に音を出してみる。※2	
②中国の伝統衣装※3	(10分)	・中国の伝統衣装を、写真などを使って紹介する。	
5) 質問コーナー	5分	・Sさんの話を聞いて疑問に思ったことを質問してもらおう。感想を発表してもらおう。	
6) あいさつ	3分	・中国語で、お別れのあいさつを。	
7) Sさんが退場する	2分	・音楽や歌でSさんとお別れする。	
10. 受入学校に準備して頂くもの	CDプレイヤー、世界地図、指し棒 パソコンに対応した映写機・スピーカー		
11. その他	※1 大勢の子供たちの前での授業ですので、緊張をほぐすためにも音楽や歌で迎えていただけたら、本人もやりやすいのではと思います。 ※2 何人か子供たちに挑戦してほしいと思います。 ※3 4)②は検討中です。中国や日本の遊びなど、もっと子供たちが参加できるような形に考えてもよいのではと考えています。		

6年生4クラスを一斉に集会場に集めての授業という行事の枠組みは、受入校から示されている。一方、どのような内容にするかは、インターンの得意なこと、インターンの伝えたいこと（中国文化の紹介）を核として、岩手大学学生側から提案している。また、多数の児童を前にしての授業という設定のストレスを緩和するために、日本人院生TFは受入校に要望を出し（1.1. その他）、受入校教員と相談をしようとしている。

このように、同じGSIPであっても、研修のタイプにより求められていることが異なる。従って、GSIP受講学生には、求められていることを的確に判断し柔軟に対応する能力、授業案を協同して作成する協力性・創造性、交渉力、全体を構成するコーディネート力等広範な力が求められていることが分かる。

3 参加者の声

GSIPには履修している留学生と日本人院生以外に、受入校の教員、児童・生徒、大学の教員と多くの人たちが関わっている。日本人院生の中には、現職の教員も含まれている。現職教員がTFとしてGSIPに参加することが、内発的な学びの機会になっていることがわかった（山崎, 2004）が、その他の参加者はどのように受け止めているのであろうか。報告書、アンケートから考察してみる。

日本人TFの声

資料1のインターンDを支援するTFは、授業の感想を次のように述べている。

「英語を流暢に話し、留学生であるDさんの存在は、授業の中で良い刺激になっている。生徒は少し照れながらもDさんと対話しようとする姿勢が見られた。少し速い英語でも生徒は知っている単語を聞き取り、理解しようとしていた。Dさんも生徒が理解していないような時には、繰り返したり、少しゆっくり発音するなど工夫していた。Dさんのにこやかな人柄、プリントを一人ずつに配る心遣い、机間巡視で丁寧に個別に指導する姿はとても良かった。」（2007年6月30日、K中学校）

この感想から、さまざまな声が聞こえてくる。Dさんのよさを把握した声は、インターンとTFの関係の中で直接的にも間接的にもDさんの心に響き、Dさんの“I really like GSIP.”という気持ちに影響を与えていると思われる。また、そのように学習者と教える側の「とても良い」営みは、TF自身にとっても心地よく、教育に対して積極的な姿勢を涵養する下地となっていることと思う。さらに、日

本語をほとんど使用しない留学生インターンが作り出す“i + 1” (Krashen, 1984) という学習環境が有効に機能していることを、英語教育への声として聞くことができる。学習者の現在の言語能力レベルは、インターンのことばのすべてを理解できるものではない。しかし、インターンの持つ「何か」が「+1」となり、中学生は学びに取り組んでいる。「何か」には、D さんが用いている「繰り返し」などの手法の根幹にある、学習者が理解していないということを把握する「生徒理解」と学習者に対する肯定的な態度が含まれていることは明らかである。

児童・生徒の声

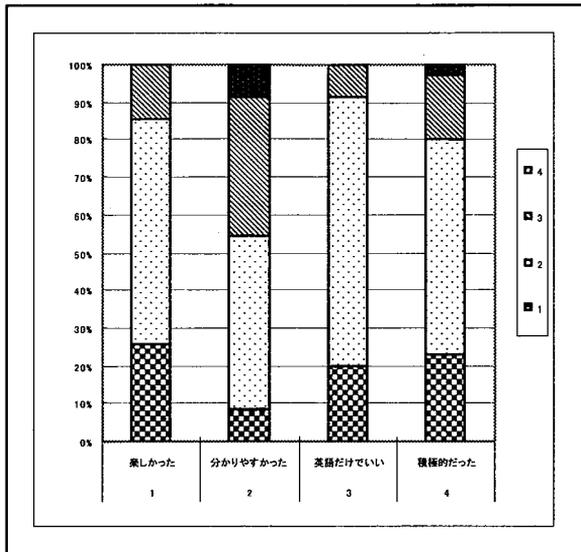
学習者は英語だけを使用したインターンの授業をどのように感じているのだろうか。2005 年度 K 中学校において実施した留学生インターンによる英語提案授業についてのアンケート結果から、学習者である中学校生徒の声聞いてみよう。

資料3 K中学校でのアンケート

1. 今日の授業は楽しかったですか？
 - ①とても楽しかった ②楽しかった ③あまり楽しくなかった ④楽しくなかった
2. 今日の授業は分かりやすかったですか？
 - ①とても分かりやすかった ②分かりやすかった ③少し分かりにくかった
 - ④分かりにくかった
3. 英語でなく、日本語で教えてほしいと思いましたか？
 - ①いいえ。英語の説明でよく分かりました。
 - ②はい。少し日本語で教えてほしいと思いました。
 - ③はい、日本語で教えてほしいと思いました。
4. 今日の授業に積極的に取り組むことができましたか？
 - ①とても積極的に取り組んだ
 - ②積極的に取り組んだ
 - ③あまり積極的に取り組めなかった
 - ④積極的でなかった
5. 今日の授業で楽しかったこと、がんばれたこと、分かりにくかったことなど、感想を自由に書いてください。

<集計結果> 回答者数:35名

各項目の平均 1-1.89 2-2.46 3-1.90 4-2.00



グラフ1 K中学校アンケート集計結果

「楽しくなかった」と回答した生徒は皆無であり、「積極的でなかった」と回答した生徒は1名であった。このことから、生徒に受け入れられた授業が展開できたと言える。質問項目の中で、受け入れの度合いが一番小さいのが、英語だけを使用した点である。しかし、日本語で教えてほしいという生徒は3名に過ぎない。自由回答欄を見てみると、日本語使用を望むとの趣旨のコメントが2名、「英語の説明がわからなかった」との記述が2名いるが、難しいが努力をしたという趣旨のコメント（例：内容を理解するのは大変だったけど、英語だけの授業も勉強になったので楽しかった）が12名おり、数値的には受入度が低い、そのことは必ずしも否定的な評価ではないことがわかる。英語だけで行われる授業が通常少ないため、抵抗感が強いと思われるが、このことは英語だけを使用した授業が受け入れられないという意味ではない。逆に、“i+1”の学習環境を作り出し、学習者の意欲を高めうることを示唆している。

定期的な研修を小学校で実施した場合では、児童はどのような感想を持ったであろうか。2004年度、インドネシアの教員研修生WさんがT小学校において定期的な研修を行った事例のアンケート結果を見てみる。

資料4 T小学校アンケート(1部抜粋)

対象:6年生54名(男31名、女23名)

1. Wさんの授業を受けてみて、Wさんの国インドネシアに行ってみたいと思いましたが？
 - ア すごく思った 33名(男18名、女15名) …61%
 - イ 思った 21名(男13名、女8名) …39%
 - ウ あまり思わなかった 0名
 - エ 全く思わなかった 0名
2. Wさんの授業の中で一番心に残っているのは次のうちどれですか？
 - ア インドネシアの「地理・歴史・文化」を紹介した授業
1名(男0名、女1名)…2%
 - イ インドネシアの「あいさつ」について紹介した授業
3名(男3名、女0名)…6%
 - ウ インドネシアの「子供の遊び」について紹介した授業
13名(男7名、女6名)…24%
 - エ インドネシアの「家庭料理」について紹介した授業
26名(男16名、女10名)48%
 - オ インドネシアの「学校生活」について紹介した授業
11名(男5名、女6名)…20%
3. 他の国から来た留学生の話も聞きたいですか？
 - ア はい 50名(男28名、女22名)…93%
 - イ いいえ 4名(男3名、女1名) …7%
4. 行ってみたい国がありますか？
 - ア はい 54名(男31名、女23名)…100%
 - イ いいえ 0名
5. その他Wさんの授業を受けて感じたことを自由に書いてください。
 - ・あんまり、他の国について興味はなかったけれど、この勉強は、楽しくて、興味を持ってました。
 - ・この学習をするまでは、インドネシアのことを全然知りませんでした。でも、言葉、学校生活、料理のことを学習して、世界は広いんだなあと思いました、自分が学習したあいさつが、インドネシアの人に通じるかを、大きくなってから、インドネシアに行つてためしてみたいです。テリマカシー

インターンの受け入れに否定的な声は全く見られなかった。多くの児童が、自由記述の欄で、「テリマカシー」というインドネシア語を使っており、文化を伝えるインターンの試みが成功していることが窺われ、小学校の総合的学習の時間における国際理解教育の一助としての可能性が示されている。

受入校の声

受入校の声はアンケートからと TF の報告書・報告から窺い知ることができた。アンケートにおいては、国際理解教育というコンテンツに関する点、受講学生の態度・意欲について肯定的な声が多かった。例えば、「外国人と間近で接する貴重な機会を与えていただき、ありがたかった。子ども達の異文化に対する興味や関心は大きく高まった。可能であれば、再び機会を与えていただけるとありがたい」「誠実に一生懸命授業していただいた。用意された資料も適切でわかりやすかった」がその代表的な声である。問題点として挙げられたのは、曜日の固定、年度の変わり目での引き継ぎ方など運営に関わる問題である。また、文化差・コミュニケーションの不十分さに基づく誤解は、直接的な声としては届かなかったが、受講生と大学の教員とのフィードバックの過程で問題点として把握できた。

継続的に GSIP 受入校となっていた学校がある。そのような学校では、打合せ時からインターン及び TF へ配慮をしていただいていることが、受講生の報告から窺われた。受入校に在籍する児童・生徒の教育だけでなく、GSIP により派遣される学生をも教育するという、広く教育の範囲を「地域社会」に広げた対応をとっていただいている。

受講者間の声

GSIP の仕組みの一つの特徴は、学習者のカテゴリーに「インターン」と「TF」という 2 種類の学習者が存在することである。日本人大学院生 TF は日本語の不得意なインターンの日本語の支援、および、インターンの緊張をほぐそうとするなど精神的な支援も行った。これらの当初から与えられた役割以外に、インターンと TF の間には、支援者→被支援者という一方向的な関係ではなく、相互交流が見られた。資料 4 は、中学校で定期的なインターンシップを行っているインターン R さんを支援する TF の報告書の 1 部である。

資料4 TF 報告書

- ・ 生徒の英作文中に机間巡視。
 - 積極的に生徒に近づき、アドバイスをしていた。
 - 若干、端の生徒の近くに立つ傾向があった。ぎちぎちの教室内では机の間に
入っていくのは心理的に困難なのかもしれない。→○Rさんに意識的にまん
べんなく生徒に関わるようにするように提案。
- ・ 授業の合間に生徒のプリントを添削。
 - 添削の際、黒シャープペンにて、間違えた箇所を修正し、少しではあるが「G
REAT」などとコメントを残した。→○赤ペンを添削に使うのが一般的だ
という私の提案に、●Rさんは赤ペンで多くのコメントや修正を施すと、生
徒が心理的な拒否を起こすと教えてくれた。
- ・ ライティングのためのワークシート作成
 - レイアウトにアドバイスをした。
 - 文章のレイアウトで第一段落を5スペース空けるようにしたほうが、よ
りリアルな英語の書き方であるという提案があった。

(○●印下線筆者)

被支援者であるインターンと支援者である TF はどちらも大学院生で対等な関係にある。TF からインターンへのアドバイスだけでなく、インターンからのコメントを TF はアドバイスとして受け入れている。アドバイスが一方的に行われるのではなく、それぞれの経験・考えをもとに双方向的に交換されている。

学校の中には「潜在的」カリキュラムが存在する。教室内での人間関係、教授スタイル、学習スタイル、文化に内在する隠れたカリキュラムなど。教育内容に関わる改革が「コンテンツの改革」として進行しているが、これらの潜在的カリキュラムに関わる改革は「プロセスの改革」とよばれ、取り組みが始められている(パイク他、1997)。GSIP は教室内の人間関係を固定的なものから変化可能なものへ変えている。支援する側が支援され、被支援者が支援することもある。このようにして協働的学習 (collaborative learning) を実現する仕掛けを有しており、「プロセスの改革」という観点において可能性を持つと言える。

おわりに

GSIP 参加者の中で響き合う声は多様であった。K 中学校の生徒の自由回答の中には、「日本語があまり分からなくて大変だったと思うのですが、一生懸命授業

をしてくれてありがとうございました」との記述もあった。受入校の生徒と受講生、受講生と受講生、受講生と受入校の先生、受入校と学生を派遣している大学との間には、授業が教室の中だけで行われているときには聞こえない声が生まれていた。このような **Partnership**=協力関係は私達の未来を創り上げる要素の一つであり、GSIP が社会に果たしうる主要な可能性と言えるであろう。GSIP は学生を受入れていただいている学校、教育委員会の協力なしには成立しない科目であり、深く感謝するとともに、そこから生まれる新たな **Partnership** を大切にしたい。

最後に、もう一度デューイのことばを振り返ってみよう。

What the best and wisest parent wants for his own child, that must the community want for all of its children. Any other ideal for our schools is narrow and unlovely; acted upon, it destroys our democracy. All that society has accomplished for itself is put, through the agency of the school, at the disposal of its future members. All its better thoughts of itself it hopes to realize through the new possibilities thus opened to its future self. Here individualism and socialism are at one. (Dewey 1915; p.5)

デューイの100年以上も前のことばは、個人主義的傾向が強まり、市民性をどのようにして育成するかが課題となっている現代においてますます魅力のある、しかし、重いことばである。教員養成機関においては、学生が個人としての力量を深めると同時に、市民として社会との繋がりを獲得し、そしてその市民性を次世代に伝えていく力を養成していかなければならない。

英語教育においては、「総合的学習の時間」の設置（文部省，1998）により、初等教育において国際理解教育の一環として英語活動が導入されたことに伴い、その整合性のために、中等教育における外国語の目標に「文化の理解」が付け加えられた（文部省，1998・1999）。言語から文化へ射程を広げて、英語教育が実現されることが求められている。文化とは地域社会から地球規模まで幅広く、また、動的に構成され続けるものでもある。であれば、英語教員養成においては、言語「について」の知識を伝えるだけでなく、文化「について」、そして文化を構成する主体「として」学ぶ機会を学習者に与える必要がある。GSIP という教室の外に出る大学院教育プログラムは、その試みの一つとして位置づけられる。

参考文献

- グラハム・パイク, デイビッド・セルピー. (1997). 『地球市民を育む学習—Global Teacher, Global Learner—』 明石書店.
- 斎藤栄二他. (1986). 『インプット理論とその実践 新しい英語科授業の創造』 東京: 桐原書店.
- 文部科学省. (2005). 『小学校学習指導要領』
- 文部科学省. (2005). 『中学校学習指導要領』
- 文部省. (1999). 『高等学校学習指導要領』
- 山崎友子. (2004). 「教員研修留学生を対象としたスクール・インターンシップ・プログラム(GSIP)—その内発的研修機能」『2003 年度日本教育大学協会研究集会発表論文・全体討議要旨』 189-192.
- Dewey, J. (1915). *The School and Society & The Child and the Curriculum*. University of Chicago Press.
- Gregorc, A. F. (1982). *An Adult's Guide to Style*. MA: Gabriel Systems Inc.
- Krashen, S. (1984). *The Input Hypotheses: Issues and Implications*. London: Longman.

¹ 2005 年度WG: 英語教育専修—山崎友子、ジェームズ・ホール教員、学校教育専攻—大河原清教員、2006 年度WG: 英語教育専修—山崎友子、ジェームズ・ホール教員、数学教育専修—小宮山晴夫教員